J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 1, No. 2 (2017) 13～20

母音交替

―「雨」の基底は「あめ」と「あま」のどちらであるか―

小　野　浩　司

Vowel Alternation between/ame/and/ama/

Koji Ono

要　　旨

「あめ」が先か、「あま」が先か。常識から言えば「あめ」が先であるが、しかし、多くの国語学者はそうは考えない。「あま」が先なのである。これは一体なぜであろうか。本論のテーマはまさにこの点にある。なぜ多くの国語学者は「雨音」に現れる「あま」の音から単語「あめ」（雨）の音を導き出そうとするのか、その根拠とするところを検討することが本論の目的である。とくに、この派生の中で設定されている */i/（* は実際に発音される音でないことを示す）に関して、その独立した根拠付けの有無を議論する。また、本論では、このような */i/に頼らない、「ソノリティー（共鳴性）」という視点からの母音交替というものを考察する。本論が参考にする文献は主として沖森（2010）である。この本はいわゆる概論書であるが、母音交替に関する記述が多く、したがって、従来の分析のどこに問題があるのかを知るには有益な文献である。

0．序

「雨音」は「あまおと」と読み「あめおと」と読まない。このような場合「あめ（雨）」の「め」が「ま」に変化したと考えるのが普通である。なぜなら、複合語とはそれを構成する単語が結合して出来上がったものであるから、「雨音」に関してもその構成素である「雨」と「音」が結合して出来上がったと考えるのが普通であり、そうであれば、「あめ」は複合語になった時点で「あま」に変化したと考えるのがこれまた至極当然の推論と言える。しかし、このような推論に異を唱える国語学の研究者が多いこともまた事実である。実際、彼らは上記のプロセスとは全く逆のプロセスを想定している。すなわち、「あめ」という音は「あま」から派生したという考え方である。かりにこの考えが正しいとすると、複合語（「雨音」）の音が先にあってそこから単語（「雨」）の音が派生したことになり、部分と全体との関係が逆になってしまう。さらに、「あま」という音は複合語にしか現れない音（これを「被覆形」と呼ぶ）であるから、その被覆形が先に存在してその後に「あめ」という音（これを「露出形」と呼ぶ）が派生したということになると、複合語を形成する以前から存在していたはずの「雨」という語は何と読まれていたのであろうか、という疑問が生じる。それを日本人は「あめ」と読んでいたのか、それとも「あま」と読んで

佐賀大学　教育学部　学校教育講座

いたのか。もちろん、彼らの説に従えば複合語になる前の単語としての「雨」は「あま」と読むべきであるということになる。そうなると「雨が降るだろう」を大昔の人は「あまがふるだろう」と言っていたことになるが、果たしてそうであろうか。前もって述べておくが、本論はこのような疑問に対して古典のデータを駆使し明確な解答を与えるものではない。むしろ、国語学の門外漢として、外から「なぜ多くの国語学者が常識とは異なる説を唱えるようになったのか」についてその経緯をたどるとともに、そこに至るまでの推論に矛盾はないのかなどを検討する。

1．沖森（2010）

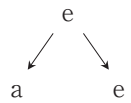
1．1 母音交替

本論で議論するのは「あめ」（雨）と「あま」、「ふね」（船）と「ふな」などの対に起こる/e/〜/a/の母音交替である。これは国語学で言うところの露出形と被覆形の間に起こる母音変化のことであり、前者は単語がもつ音であり、後者はその単語に別の単語あるいは屈折語尾が接続してできた音である。母音交替は日本古来の和語あるいは大和言葉にのみに観察される現象である。本論ではこのような母音交替の中でもとくに/e/〜/a/に焦点を当て、その交替の派生過程について検討する。もちろん、/e/〜/a/以外のパターンも存在する（(1)を参照）。(1)には、説明の都合上、名詞における交替のみ列挙し、動詞の屈折に伴う交替は取り上げていない。

(1) a. e〜a：ame〜amayadori（雨宿り）　hune〜hunayoi（船酔い）　te〜tazuna（手綱）
b. i〜o：ki〜kodachi（木立）　hi〜homura（火＜火群）
c. i〜u：tuki〜tukuyo（月夜）
d. o〜a：siro〜siratori（白鳥）

上でも述べたように、本論ではこれらの例の中からとくに（1a）の母音交替に焦点を当てその派生過程を議論する。（1a）を選択する理由としては、i）/e/〜/a/の交替が他の交替に比べ数的に多く見られること、ii）（1a）と他の母音交替は同一の方法で説明可能であること、の二つが考えられる。

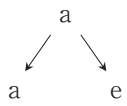
まず、（1a）に関して一般の人が抱いている最も典型的な派生の仕方を見てみよう（窪薗（1999）参照）。

(2)


(2)は、/ame/〜/amayadori/（雨宿り）の交替において、/ame/を基底とし、そこから/ama/と/ame/が派生したという図である。言い換えれば、(2)は、露出形/ame/から被覆形/ama/が派生したことを表し、複合語をどう読むかはそれを構成する要素の発音に依存するということを示唆している。

何の問題もないように思われる(2)の派生図であるが、実はそれとは真逆の派生図を考えている研究者も多くいる。すなわち、/ama/を基底とし、そこから/ame/を派生させるという構図である。これによれば、被覆形の音（/ama/）が先にあってその後に露出形の音（/ame/）が生じたことになる。(2)にならってこれを図示すると次のようになる。

(3)



この図は明らかにわれわれの常識とは異なっているが、それは、「被覆形」（/ama/）は複合語にしか現れない音であるにもかかわらずその音が先にあって、その後に「露出形」（/ame/）が生じたということをこの図は示しているからである。複合語が出現するよりずっと以前に存在していたはずの単語「雨」を日本人は何と読んでいたのであろうか。(2)が正しいとすると、複合語になる前の「雨」は/ama/と読んだことになるが、そうであるなら「雨が降るだろう」を大昔の人は「あまがふるだろう」と言っていたことになる。

以下では、上で述べた被覆形から露出形の派生に関して、なぜこのような発想が生まれてきたのか、その原因を突き止め、合わせてそれに対する疑問もいくつか指摘する。

1．2　沖森（2010）

本論で紹介するのは沖森（2010）『はじめて読む　日本語の歴史』である。この著書において沖森は母音交替を「後ろに名詞が続く場合と、独立して用いられる場合とで、a と e というように母音が交替して別の語形となることがある」のように記述している[1]。沖森（2010）が/a/～/e/に関して挙げている例には以下のようなものが含まれる。

(4) kaz<u>a</u> + kami（風上）　vs. kaz<u>e</u>（風）　　fun<u>a</u> + nori（船乗り）　vs. hun<u>e</u>（船）

注意すべきは、沖森自身は(4)において被覆形から露出形への派生を考えているということである。これはつまり、/kaza/から/kaze/、/huna/から/hune/が派生したということを意味している。簡単に言えば、/a/→/e/ということである。このような派生の仕方に対する疑問点については既に上で述べたとおりであるが、しかし、より問題なのは「何が母音交替を引き起こすか」という原因のほうである。沖森（2010）はその原因が仮想の接尾辞 */i/にあると考えた[2]。すなわち、/a/から/e/を直接派生するのではなく、/a/に */i/を接続することによって/e/を導き出すのである。この/a/+ */i/→/e/という派生は沖森（2010）が主張する「被覆形から露出形を派生する」という考え方には好都合な派生方法である。なぜなら、はじめに/kaza/や/funa/という被覆形が存在し、それらに */i/を接続することによって（すなわち、/kaza/+ */i/や/funa/+ */i/のようにすることによって）露出形/kaze/や/hune/を生じさせることができるからである。なお、この */i/の機能は「単語として独立させるため」と規定されている（沖森2010：54-55）。ここで「単語として独立させる」とは被覆形（＝複合語）から露出形（＝単語）を導くことを指すと思われる[3]。

2．疑問点

前説で概観した沖森（2010）の分析にはいくつかの素朴な疑問がある。まずは、すぐ上で見た接辞 */i/の機能についてである。沖森（2010）はこの */i/の役割を「単語として独立させるため」と規定している。確かに動詞の未然形から名詞を作る場合（muka + i → muki（向き））、/i/はその役割を果たしているようであるが、しかし、この/i/は沖森が言うところの想定の */i/ではなく、活用の際に現れる極普通の/i/である点に注意する必要がある[4]。また、本論で問題にしているのは「雨音」/amaoto/～「雨」/ame/

などに見られる二つの独立した名詞の母音交替であることから、*/i/がもつ「単語として独立させる」機能がこのような場合に実際に働いているのかどうか疑わしい。被覆形・露出形ともすでに独立した単語である場合の */i/の役割がどこにあるのか不明である。かりに、/ama/＋*/i/→/ame/の派生を裏付ける/amai/（雨い）という語形が実際に存在していれば沖森（2010）の主張の妥当性も立証できるが、今のところそのような証拠は見つかっていない。ただ、この点に関しては沖森（2010）自身が、/i/は「資料では確認できない仮想のもの」と述べており（沖森2010：54-55）、そのような証拠は存在しないことを認めている。いずれにしても、「雨音」（/amaoto/）の「雨」はすでに独立した単語であり、それにさらに単語として独立させる機能をもつ仮想の/i/を付加するにはそれなりの根拠を提示することが必要であるが、沖森（2010）においてそれはなされていない[5]。

沖森（2010）が提案する派生のプロセスにも問題はある。というのも、同じ/a/＋*/i/であってもその出力形が異なる場合があるからである。もう一度/ama/～/ame/, /muka/～/muki/の例を見てみよう。

(5) a. ama + *i → ame
　　b. muka + *i → muki

（5a）では母音交替の出力形が/e/であり、（5b）ではそれが/i/となっている。同じ母音の連続で名詞と動詞の出力形が異なるというのはどういうことであろうか。沖森（2010）はこの問題を解決するために、前者を母音交替、後者を母音脱落（/a/＋*/i/の/a/が脱落すること）と考える（沖森2010：55）。しかし、名詞は母音交替を起こし、一方で動詞は母音脱落を起こすということは、名詞と動詞が母音連続に関して異なる処理の仕方をしているということを意味している。したがって、ここでも沖森（2010）が提案する、「名詞と動詞を同類のものとして扱い両者に仮想の */i/を設定する」という仮説の無理が実証されたと考えることができる。

次に派生の方向性について見てみよう。一般には露出形→被覆形という図式を考えるのが普通であるが、沖森（2010）のように仮想の */i/を設定すると、その方向は逆、すなわち、被覆形→露出形という図式になる。なぜなら、仮想の */i/は被覆形にしか付かないからである。たとえば（1a）の/ama/＋*/i/→/ame/, /funa/＋*/i/→/fune/などがその具体例である。問題は、複合語にしか現れない/ama/という音の後に/ame/という音が生じたということになると、複合語「雨音」が形成される前の単語「雨」は果たして何と読まれていたのか、ということである。「雨音」が先にあってその後に「雨」が作られたとは考えにくいので、最初から存在していた「雨」を日本人は/ame/と読んでいたのであろうか。もちろん、沖森（2010）の説に従えば/ama/と読んでいたということになるが、大昔の人が空を見上げて「雨があがった」と言うとき、「あまがあがった」と言っていたかどうか、大いに疑問である[6]。また、言語の一般的傾向から言って、単語が複合語になるときに音変化が起こるのが常であって、複合語を単語にした場合に音変化が起こるのではない[7]。

3．*/i/の代案

前節では沖森（2010）の分析に対する疑問点を幾つか紹介した。本節では沖森（2010）の提案する/ama/から/ame/への派生ではなく、いわゆる常識的な/ame/から/ama/への派生を検討する。常識がどこまで通用するのかを調べることが本節の目的である。

さて、*/i/を設定することなく/ame/から/ama/への母音交替（/e/→/a/）を説明するにはどのような方法が考えられるであろうか。かりに */i/に代わる何らかの仮想母音 */x/を設定し、それによって母音交

替を説明するのであれば（/ame/+ */x/→/ama/）、沖森（2010）の分析と差はないことになる。そこで、本論では全く別の観点、すなわち、「ソノリティーの上昇」という観点から今問題にしている母音交替がなぜ起きたのかの説明を試みることにする。

ここで言うソノリティーとは音が固有にもつ特性の一つで、問題とする音がどれぐらい遠くに聞こえるかによってその音のソノリティーの大きさが決まってくる。声の大きさ・高さ・長さなどを一定するという条件のもとで、ソノリティーの大きさはほぼ音が届く距離に比例する。一般には低母音ほどソノリティーは大きくなり、高母音ほどソノリティーは小さくなる。したがって、5母音体系の日本語では/a/＞/e, o/＞/i, u/という順にソノリティーは小さくなっていると考えられる。このようなソノリティーの階層を前提にすると、（6a）に見る/ame/から/ama/への変化はソノリティーの低い母音をソノリティーの高い母音に変更する操作だと言える。また、（6a）以外の母音交替を観察するとき、これらに対しても同じ操作が適用されていることに気付く。

⑹（＝⑴）a. e～a：ame～amayadori（雨宿り）　hune～hunayoi（船酔い）　te～tazuna（手綱）
b. i～o：ki～kodachi（木立）　hi～homura（火＜火群）
c. i～u：tuki～tukuyo（月夜）
d. o～a：siro～siratori（白鳥）

沖森（2010）の主張とは異なり、露出形から被覆形が派生したと考えると、（6b）では/i/→/o/という変化が、また、（6d）では/o/→/a/という変化が現れていることになる。注意すべきは、（6a）同様これらの例においてもソノリティーが上昇しているという点である。以上のことから母音交替に関して以下のようにまとめることができる。

⑺ 露出形から被覆形への母音交替においてソノリティーは上昇しなければならない。

しかし、⑺ではまだ不十分である。なぜなら、（6c）の/i/から/u/への交替においてソノリティーの上昇は見られないからである。そこで、当該の母音においてソノリティーは上昇するかあるいは同等であるという趣旨で、以下のように⑺を修正する。

⑻ 露出形から被覆形への母音交替においてソノリティーは下降してはならない。

ここで少し⑻が意味するところを考えてみよう。問題は、露出形から被覆形へと派生するとき、ソノリティーはなぜ下降してはならないのかということである。この質問に対する本論の解答は、ソノリティーを上昇あるいは維持することによって連続する二つの語（N1とN2（Nは名詞））の結びつきをより強くしている、というものである。本論ではここでのソノリティーはいわば接着剤の役割を果たし、それが上昇することによってさらにその効果を大きくすると考える。⑹において（c）を除くすべての例でソノリティーが上昇しているのはそのせいであると思われる。このようなソノリティーの上昇は複合語全体に一体感をもたせ、あたかも最初から一つの単語であるかのような印象を聞き手に感じさせる効果がある。この接着剤としてのソノリティーの効果は、もちろん接着が可能な位置（たとえば語と語の間）においてのみ有効であって、接着が必要ない位置（たとえば語末）では無効である。

(9) ama + sake → amazake　　naga + ame → nagaame

(9)における/sake/の/e/や/ame/の/e/は/saka + gura/「酒蔵」や/ama + oto/「雨音」とは違って被覆形の前部要素（= N1）の末尾母音ではない。それゆえ、この位置が二つの語を接着する位置でないことは明らかであり、/e/のソノリティーが上昇して/a/にならないのはこのためである。

本節では露出形（/ame/）から被覆形（/ama/）への母音交替（/e/→/a/）を仮定してきた。現時点でこの仮説に問題はなく、したがって、沖森（2010）の被覆形から露出形への分析が唯一可能な分析であるわけではないことがわかった。

4．/e/の存在

先史の日本語（沖森はこれを「古層の日本語」と呼ぶ）には/e/が存在しなかったという説がある。もしこの説が正しいなら、沖森（2010）でなされた主張の妥当性が増し、逆に本論が沖森（2010）に対して投げかけてきた疑問の正当性はかなり薄れることになる。なぜなら、/e/が先史の日本語において存在しなかったのであるなら、その時代「雨」を/ame/と発音することはなかったはずである。そうであるなら、/ame/を基底にしてそこから/ama/を導き出すという本論の主張はその根拠を失うことになり、他方で、沖森（2010）が主著するように、/ama/を基底にしてそれに仮想の */i/を接続することによって/ame/を導き出すという見解ががぜん説得力をもつことになる。

さて、/e/が先史日本語に存在しなかったとして、それでは/e/はどのようにして日本語に出現したのであろうか。突然何もないところから/e/が生じたということは考えにくい。沖森（2010）が着目したのは母音融合という日本語によく観察される音韻現象である。母音融合とは連続する異なる二つの母音を一つに融合することで、沖森は/e/の出現に対してもこのような融合が起こったと仮定する。古代の日本語ではエ甲類とエ乙類という２種類の「エ」が存在するが、沖森（2010）はこの２種類の「エ」に対して融合が働いたと考える。さらに言うと、前者は/ia/が融合したもの（/yukiari/「行きあり」→/yukeri/「行けり」）であり、後者は/ai/が融合したもの（/aka/「赤（し）」+ */i/→/ake/「明け」）であると考える（沖森2010：56-57）。

これら二つの融合の中で、エ甲類の生成（/yukiari/→/yukeri/）は動詞の屈折に関わることであり、その中の/i/は屈折語尾として本来日本語に備わっている接辞であることから、何ら問題はない。一方で、エ乙類の生成（/aka/+ */i/→/ake/）に現れる/i/は明らかに屈折語尾ではなく、融合を可能にするために新たに設けられた「想定の母音」である。すでに２節で議論したように、このような母音の設置にはそれを設定するだけの独立した根拠付けが必要であるが、沖森（2010）を読む限りそのような根拠付はなされていない。

先史日本語の母音体系には/e/が含まれていないという説は現在多くの国語学研究者が採用している説であるということはすでに述べた[8]。しかし、沖森を含めたこれらの研究者が主張するように、/e/乙が/ai/から変化したと考えると、単音節で/e/乙と発音する単語は先史においてすべて/ai/と発音していたことになるが、果たしてそうであろうか。具体には、たとえば上代の一音節名詞/ke/（気）や/me/（目）は母音として/e/乙を含むが、これらは先史において/kai/や/mai/と読んでいたのであろうか、ということである。現在/me/と言っているものをかつては/mai/と言っていたという証拠がひとつでもあれば沖森（2010）の説を信じるに足る十分な証拠になるが、今のところそのような証拠は見つかっていない。さらに、これも沖森（2010）が主張するように、*/i/を「名詞を形成するための仮想の接辞」と仮定すると、すでに名詞として独立している「目」や「気」にさらに名詞を形成する */i/を付加することの余剰性はど

のように説明したらいいのであろうか。以上のことから、本論では母音融合による/e/の創出にはまだ答えるべき疑問が残っており、その方法が唯一の解決策ではないことを指摘する。

5．まとめ

本論では沖森（2010）で論じられた母音交替の分析に対し幾つかの疑問点を指摘した。とくに沖森（2010）が名詞を形成するために仮定した想定の/i/（＝ */i/）についてはまだ不明点が多く、このような */i/の設定についてはより慎重な議論が必要であることを論じた。本論ではさらに、*/i/を用いないで/a/～/e/（/ama/と/ame/）の交替を説明する方法として母音の「ソノリティー」という特性に着目し、最終的にはソノリティーの上昇こそが母音交替の直接原因であるという提案を行った。

注

* 本研究は平成28年度科学研究費補助金（基盤研究(C）課題番号15K02483）の助成による研究成果の一部である。

1．沖森（2010：54）参照。なお、沖森（2010）では前者を非独立形、後者を独立形と呼んでいが、本論では、これらをそれぞれ被覆形、露出形と呼ぶ。

2．このような提案は沖森（2010）が最初ではなく、大野（1977）や松本（1995）においてもなされている。

3．後述するように、沖森（2010）は名詞だけではなく動詞・形容詞の未然形に付く接辞/i/（muka + i → muki（向き）、aka + i → ake（明け））もここで紹介する */i/同様「単語として独立させる接辞」と考えている（沖森2010：55）。

4．沖森（2010）ではこのほかに次のような例も/i/の接続による母音交替と考えている。下の例は形容詞の語幹に/i/が付いて動詞の連用形になった場合である。

kura + *i → kurai → kure（「暮れ」）　形容詞「暗し」の語幹 →下二段連用形

沖森自身がよく出す例に、「赤い」の語幹/aka/に仮想の */i/を付加する/aka/+ */i/→/ake/という派生がある。しかし、出力としての/ake/（明け）は四段動詞「明く」に */i/が接続しても可能なので、ここでは誤解を招かないために/ake/ではなく/kure/（暮れ）を例として採用した。

5．本論では被覆形の/ama/はすでに独立した単語であるという前提のもとに議論を進めているが、沖森自身はこれを独立した単語と見なしていないかもしれない。なぜなら、「雨」を/ama/と読むことはないからである。/ama/を/ame/にするには */i/の接続が不可欠であった。しかしたとえそうだとしても、被覆形/ama/がどこから生じたのか依然不明のままである。名詞には動詞のように語幹というものがないので、唯一考えられるのは、「雨」はこの単語が生まれたときから/ama/と読まれていて、そのため「雨音」は/amaoto/と読むのが正しい、ということであろう。しかし、この場合ですら、/ama/ははじめから独立した単語であり、*/i/が接続する必要がないことは明らかである。

6．同様に「酒」の場合も、沖森（2010）の主張に基づけば、/sake/は/saka/に */i/が付加したことにより派生したもので、/sake/という発音が初めから存在していたのではないということになる。しかし、そうであるなら、「酒が飲みたい」ということを言いたいとき、太古の日本人は「さかが飲みたい」と言っていたのであろうか。もちろん文献のない時代であるので、そうであるともそうでないとも言える。

注意すべきは、/saka/であれ/ama/であれ、本論ではこれらの音が初めは存在しなかったということを言っているのであって、「あめ」という語が日本語に存在していなかったということを言っているのではない。太古の日本人も空から降ってくる水をその読み方は別として現代人同様「雨」と認識していたに違いない。

7．後述する連濁や、あるいは、英語の複合語に現れる強勢の位置の移動（black BIRD vs. BLACK bird（大文字に強勢がある））などがその典型である。

8．大野（1977）や松本（1995）にも同様の記述がある。

参考文献

川端善明(1997)『活用の研究 I』清文堂.
高秀晩(1988)「上代日本語の母音体系」『上智大学国文学論集(21)』pp.133-156.
小林泰秀(2006)「日本語複合名詞の母音交替」『広島女学院大学論集』第56集, pp. 1-18.
窪薗晴夫(1999)『日本語の音声』岩波書店.
岸田武夫(1998)『国語音韻変化論』武蔵野書院.

松本克己(1995)『古代日本語母音論』ひつじ書房.
大野晋(1977)「音韻の変遷(1)」『岩波講座 日本語 5』pp. 147-219, 岩波書店.
沖森卓也(2010)『はじめて読む 日本語の歴史』ベル出版.
田中みどり(2003)『日本語のなりたち 歴史と構造』ミネルヴァ書房.